

英語の間接疑問文内の主語・助動詞倒置¹

—第二言語獲得におけるUGの関与について—

Subject-Auxiliary Inversion in English Indirect Questions

- The Role of UG in Second Language Acquisition -

中島 基樹 Motoki NAKAJIMA

1. はじめに

標準英語の直接疑問文においては、(1a)のように、主語とbe動詞（または完了のhave、法助動詞。以下、総称して「助動詞」と表記）を倒置することが義務的である。それに対し、間接疑問文では主語と助動詞の倒置は起こらず、(1c)のように平叙文と同じ語順になり、倒置が起きた(1d)は一般的に非文とされる。

- (1) a. Why is he angry?
b. *Why he is angry?
c. Do you know why he is angry?
d. *Do you know why is he angry?

日本人英語学習者の間では、しばしば(1d)のように、間接疑問文内で主語と助動詞を倒置させてしまう誤りが見られる。いったいなぜこのような誤りが起こるのだろうか。また、学習者が倒置を起こす環境には何らかの規則性があるのだろうか。

本稿では、稲田(2001)による英語変種における間接疑問文内の語順に関する一般化に基づいて、第二言語獲得過程について予測を立て、短期大学生を対象に行った調査の結果から、その妥当性を検討する。

2. 英語変種における間接疑問文の語順

稲田(2001)は、標準英語の口語的文体や、一部の英語方言においては、(2)のように間接疑問文内でも主語と助動詞の倒置が起こる場合があることを指摘している。

- (2) "Will that gentleman who differs with me

please stand up and tell the audience [what has he ever done for the good of the city]? (稲田 2001: 2)

しかしながら、このような倒置は常に認められるわけではなく、以下の①～③のような環境においては、それらの英語変種においても倒置が起こることはないという。

① 文主語位置

- (3) *[What has he ever done for the good of the city] does not matter at all. (稲田 2001: 3)

② 外置節

- (4) *It is not clear [when did he come back]. (稲田 2001: 7)

③ 叙実動詞²の補部

- (5) *We all know [what has he done for the good of the city]. (稲田 2001: 4)

ただし③に関しては、主節の動詞が叙実動詞であっても、次のような環境においては倒置が許される場合があるとのことである。

- (6) a. Do you remember [did they live in Boston]?
b. I've never found out [would he have come with me].
c. She wants to know [who did I appoint]. (稲田 2001: 7)

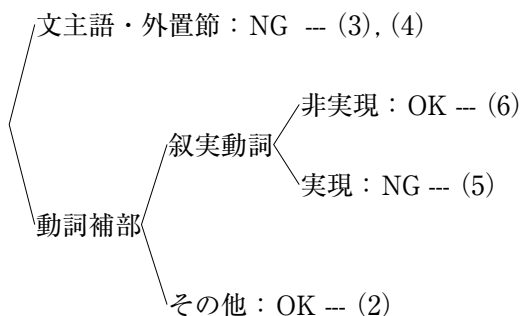
(6a)は疑問、(6b)は否定、(6c)は願望を表わす文であり、いずれも叙実動詞の表わす動作・状態が実現していない。

以上、間接疑問文で倒置が起こり得る／起こり得ない環境を整理すると、(7)のようになる。

1 本研究は、2011年度卒業生の宮崎理紗、兩宮美紀の卒論指導の過程で発想を得たものである。きっかけを与えてくれた2人に心から感謝したい。

2 叙実動詞とは、know, remember, regret など、補文の内容が真であることを前提とする動詞である。

(7) 間接疑問文内で倒置が(不)可能な環境



つまり、文体や方言によって間接疑問文内での倒置が許容されるかどうか異なるのは、ask や wonder のような叙実動詞以外の動詞の補部や、主節が疑問・否定・願望などの非実現の文脈である場合に限られ、それ以外の環境で倒置が起こらないということは、英語の諸変種に共通する普遍的な性質であるようだ。

3. 第二言語獲得過程に関する予測

第二言語獲得研究における争点の1つに、第二言語の獲得においても、母語獲得の場合と同様に生得的な文法知識(UG)が作用するか否かという問題がある。(White 2003 他)

前節でみた間接疑問文内の語順に関する普遍性(各英語変種に共通で倒置が許されない環境)が、UGの原理から派生されるものであると仮定すると、第二言語学習者の獲得過程に関して、次のような予測が立つ。³

- (8) A. 第二言語獲得においてUGが関与しているのであれば、学習者は(2)や(6)のような環境で倒置を起こすことはあっても、(3)~(5)のような環境では倒置を起こさない。
- B. 第二言語獲得においてUGが関与していないのであれば、学習者は(2)~(6)いずれの環境においても同様に倒置を起こすことがあり得る。

次節では、UG関与説(8A)とUG非関与説(8B)、どちらの予測が正しいかを検証するために行った調査の方法と結果を提示し、その結果について考察す

る。

4. 調査

4. 1. 調査方法

第二言語獲得過程に関する前節の予測(8A,B)を検証するため、長野県短期大学多文化コミュニケーション学科英語英米文化専攻の1年生40名を対象に調査を行った。被験者には10の英文が書かれた用紙を配布し、以下のような指示を与えた。

- ① 文法的に正しいと思う文には○、間違っていると思うものには×と回答する。
- ② ①で×と答えた場合は、その理由を述べ、正しい文に訂正する。

今回調査に用いたのは、(9)に示された二つの文である。

- (9) a. (*) Do you know why was he angry?
b. *It is clear why is she happy.

どちらも間接疑問文内で倒置が起きており、標準英語(学校文法)では「誤り」とされるものであるが、(9a)は2節の(6a)に対応する文で、主節の動詞は叙実動詞であるものの、主節が疑問文になっているため、一部の英語変種においては倒置が容認される文である。一方(9b)は、2節の(4)に対応する文であり、whyで導かれる節が動詞の補部ではなく、主語からの外置節となっているため、それらの英語変種においても倒置は容認されない。

(9a)と(9b)は、一見どちらもwhyによって導かれる節が文の後半に現れるという点で類似しており、第二言語学習者がUGに関係なく、表層的な一般化のみに頼って学習しているのだとすれば、疑問詞whyの存在により、どちらの文においても同程度に主語と助動詞の倒置を容認することがあり得るだろう。もし表面的な類似性にもかかわらず、学習者が(9a)と(9b)を区別し、(9a)においてのみ倒置を容認したならば、第二言語獲得において何らかの生得的な文法知識(UG)が働いているという可能性が示される。

³ 英語変種において倒置が許されない環境が、UGによって決定されることを検証するためには、英語以外の言語においても同様の一般化が成り立つかどうか調査する必要がある。

4. 2. 結果

調査の結果、(9)の各文について、被験者の正答率(「×」と答えた上で、正しく主語と助動詞を入れ替えて訂正できた割合)は以下ようになった。⁴

(9a): 67.5% (27/40名)

(9b): 82.5% (33/40名)

英語の諸変種においても倒置が許されない(9b)の文については、8割を超える被験者が正しく誤りを指摘し訂正することができたのに対し、一部の英語変種において倒置が許される(9a)に関しては、倒置された語順を容認する被験者が40名中13名おり、正答率が(9b)を大きく下回った。

4. 3. 考察

(9a), (9b)の間の正答率の差は、第二言語学習にUGが関与しないとする立場(8B)のもとでは予測されないものである。また、(9)の各文を日本語訳した(10)を見ても、whyで導かれる部分の訳され方は全く同じもの(「なぜ〜か」となり、被験者が日本語に訳すことによって、何らかの判断の手がかりを得たということも考えられない。

(10) a. 彼がなぜ怒っていたか知っていますか。

b. 彼女がなぜ喜んでいるのか(は)明らかだ。

したがって、本調査の結果は、第二言語獲得においてUGが何らかの形で関与するという(8A)の立場を支持するものである。

ただし、今回用いた(9)の各文の間には、主節が疑問文であるか否かという点での表面的な違いがあり、それが被験者の回答に影響を及ぼしたという可能性も否定できない。今後の調査において、主節が疑問文でない(11)のような文においても、学習者が

(9a)と同様、比較的高い割合で倒置を容認するかどうか検証する必要がある。

(11) a. (*) Please tell me why is he angry.

b. (*) I don't know why is he angry.

c. (*) I want to know why is he angry.

5. まとめ

本稿では、第二言語獲得においてUGが機能するか否かを検証するための1つの事例研究として、異なる環境に現れる間接疑問文における日本人英語学習者の主語・助動詞倒置の容認度を調査した。英語の変種において倒置が起こり得る環境とそうでない環境とで、被験者が倒置を容認する割合に差が見られたことから、第二言語獲得においても、母語獲得の際と同様にUGが関与しているという可能性が示された。

今回の調査は、間接疑問文で倒置が可能／不可能なくつかの環境のうち、二種類の文のみを調査対象としたものである。第二言語学習者が、英語の変種において容認される環境でのみ倒置を容認するということを明確にするためには、(11)で挙げた各文を含め、他の環境に現れる間接疑問文についても、今後さらなる調査が必要とされる。

参考文献

- 稲田俊明 (2001) 「補文内倒置と言語多様性 (1) - 間接疑問文と CP 構造 -」『文學研究』98、九州大学
White, L. (2003) *Second Language Acquisition and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

(長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科
英語英米文化専攻)

(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)

(平成24年10月1日受付、平成24年11月28日受理)

4 (9a)に対して「×」と回答した被験者は32名であったが、そのうち5名は主語と助動詞の語順ではなく、時制の変更やdoの挿入など、不適切な訂正をしたものであった。